

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：34313

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24656362

研究課題名(和文)琉球建築史の創成

研究課題名(英文)Creation of Ryukyu architectural history

研究代表者

高橋 康夫 (TAKAHASHI, Yasuo)

花園大学・文学部・教授

研究者番号：60026284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：琉球の建築史についてほとんど記述がないことから、「琉球建築史」の創成という未知の重要課題に挑戦した。

その結果、琉球列島の文化に固有の伝統を維持する根強い傾向があること、新たな変化は外国との交流によってもたらされたことなどから、琉球建築史の構成を、固有の伝統を継承する建築群、近代化の原動力というべき建築群に大別し、そして前者を基軸としつつ、それぞれの変遷ならびに相互の関係とその関係の変遷として琉球建築史を叙述するのが妥当と考えた。

研究成果の概要(英文)：Because there was almost no description about architectural history in Ryukyu, I challenged an unknown important issue as creation of Ryukyu architectural history.

As a result, it found that there is a strong tendency to maintain a unique tradition in the Ryukyu culture, and new changes have been brought about by interaction with foreign. These are important facts. Therefore, the configuration of the Ryukyu architectural history, is roughly divided into building group inherit a unique tradition, and building group said to promote the modernization. And setting the former as the foundation, I will delineate the Ryukyu architectural history as each of transition and a mutual relationship. We think this method is appropriate.

研究分野：都市・建築史

キーワード：琉球 建築史 都市史 東アジア まちづくり

1. 研究開始当初の背景

琉球建築の研究は、国内の研究者による近代の建築や民家・集落の調査研究がほとんどであり、前近代については首里城などを対象とするものを除いて皆無に近い状況である。抛るべき「琉球建築史」の通史・概説がないことは学術上の大きな欠陥といってよい。

筆者は10年にわたり琉球の都市形成や環境文化の研究を行い、史料不足という大きな制約の下で新史料の発見や金石文・漢詩などの史料価値の再発見、絵画史料の批判的活用など、創意工夫に満ちた研究方法によって琉球の都市・環境文化史の解明に多大な成果をあげた。これらをさらに充実・展開すれば未開拓の「琉球建築史」を創成しうると考えるに至った。

2. 研究の目的

日本建築史には、さまざまな学術的立場から叙述された通史・概説がある。しかし、これらは日本本土の建築史であり、近代以前に独自の国家であった琉球の建築史についてはほとんど記述がない。さらに、東アジアの歴史と文化が注目され、また歴史的風致や文化的景観の価値が現代都市のまちづくり・景観形成と関連して重要性を増していることから、琉球・沖縄の建築に関する知識の獲得は必要性・緊急性の高い課題となっている。

本研究はこうした学術的・社会的課題に応えるために「琉球建築史」の創成という未知・未開の重要課題に挑戦する。

3. 研究の方法

研究方法の中核としたのは、資料価値のきわめて大きい戦前の琉球建築調査報告から有益な情報を十分に抽出すること、建築史学・都市史学の立場から東アジアとの比較史的な視点と方法を援用すること、学際的な検討を通じて「琉球建築史」固有の枠組を創成すること、鐘銘や琉球の景観を描いた絵画(ほぼ収集済み)などの画像情報を駆使すること、などである。

14世紀後半から19世紀半ばまでの琉球王国の時代、そして主要な建築類型(グスク、住まい、宗教建築など)および集落・都市を対象とし、「琉球建築史」の創成のために不可欠な基礎的論点を解明する。主なものは以下のとおりである。

(1) 既往調査研究および現存建築遺構の再評価：近代における沖縄建築調査の再評価：戦前の琉球建築調査報告には現在では入手不可能な情報、また琉球建築史についての概説や見通しを含む貴重な著作(田辺泰『琉球建築』(座右宝刊行会、1937年)、伊東忠太『琉球建築文化』(東峰書房、1942年)、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、1982年))を詳細に分析し、有益な情報を獲得する。現存建築遺構の再評価：戦後に実施された調査報告(民家、伝統的建造物群、近代建築、近代化遺産の調査報告など

を分析し、琉球建築の特質を把握する。

(2) 「琉球建築史」の枠組：関連諸分野の時代区分論：近年の琉球史研究、とくに考古学と歴史学、国文学の時代区分論について、その構想、枠組、変化を検証する。琉球建築史の時代区分論：上記の検証と連動させて、建築史学・都市史学の視点から独自の時代区分の仮説を組み立てる作業を行う。(3) 主要な建築類型および寺院・王城・集落・都市の空間構成の変遷過程：グスク：首里城正殿はその特性また資料が比較的多いことから「琉球建築史」構築の軸となる。考古学の調査成果や史料、とくに冊封使の使琉球録・使琉球詩を分析し、14世紀から戦前までの変遷過程を把握する。首里城北殿・南殿、後宮の建築についてその様式、平面などを考察する。沖縄本島のほか奄美大島や八重山も視野に入れて、グスクの変遷過程を追求する。住まいと集落・都市：八重山の特異な集落や本島の集落について考古学資料・文献資料を収集し、自然・歴史・文化のなかで住まいと集落の空間構成と変遷を捉える。典型的な集落と首里・那覇の比較を行う。宗教建築：仏教建築、神社本殿、道教の廟などについて、東アジアにおける建築文化の交流を視野に入れ、その様式と変遷を検討する。琉球王国の迎賓・宴遊施設：東苑・同楽苑・南苑(識名園)の空間構成とその変遷について、庭園史の成果を参照しつつ、検討する。

(4) 中国・朝鮮・日本との建築文化の交流：琉球王国成立以降については双対性の観点からの把握を行う。朝鮮との交流：高麗瓦を葺く建築について、紀年銘をもつ高麗瓦についての既往研究を整理し、どのような建築に高麗瓦が葺かれたのか、建築様式とその伝来、瓦匠や大工の問題を検討する。日本との交流について、浦添グスクを拠点とした察度王朝時代における建築文化の交流、頼重の護国寺創建伝承を手がかりに真言密教の建築の伝来を考察する。熊野信仰と神社建築、また住宅様式の伝来と実態を解明する。中国との交流について禅宗と道教の建築、華僑の住宅様式の伝来と実態を解明する。

(5) 琉球建築の評価：固有性・地域史の視点から：首里城には正殿・南殿をはじめとして、王の日常執務の二階殿など、二階建ての建築が少なくない。その特異な平面形式、重層構造を生んだ要因を考察する。また琉球の建築の根底にある「グスク」(きわめて多義的なことば)について、国語学や考古学などの成果を踏まえ、建築史的な意義を再検討する。普遍性・東アジア史の視点から：東アジアさらに世界のなかで琉球建築を位置づける。また琉球と日本、中国、韓国などの建築史との比較を通じて琉球建築の普遍的な特性を把握する。

4. 研究成果

(1) 既往調査研究および現存建築遺構の再

評価： 近代における沖縄建築調査の再評価： 田辺泰『琉球建築』（座右宝刊行会、1937年）、伊東忠太『琉球 建築文化』（東峰書房、1942年）、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）などを詳細に分析する作業を実施し、現在では入手不可能な貴重な情報、また琉球建築史についての概説や見通しなどの情報を獲得した。

伊東忠太の琉球建築の分類（首里城 神社、仏寺、道観、文廟、琉球固有の神祠、陵墓、邸宅、城堡、農家、橋、庭）は、用語はともかくとして、大要を捉えていること、またとくに鎌倉芳太郎の報告は、『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第一巻 美術・工芸』・『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第二巻 民俗・宗教』（沖縄県立芸術大学附属研究所、2004年）もあわせ、貴重な史料といえるものが少なくないことを確認した。

現存建築遺構の再評価： 戦後に実施された民家、伝統的建造物群、近代建築、近代化遺産の調査報告を分析し、琉球建築の特質を把握する作業を行った結果、とくに18世紀半ばころに建てられ、穴屋（アナヤー、竪穴・掘立柱）から貫屋（ヌチャヤー、礎石建）への大きな転換を示す久米島の上江洲家住宅（重要文化財）は、重要な歴史的位置を占めると考えるに至った。また風水思想の定着を示すものとしても興味深い遺構である。

(2) 「琉球建築史」の枠組： 近年の琉球史研究における時代区分論、とくに考古学と歴史学、国文学の時代区分論について、その構想、枠組、変化を検討した。上記の作業と連動させて、琉球建築史年表を作成し、従来の歴史的な、また考古学的な時代区分にも留意しながら、日本建築史の固有というべき視点、すなわち建築・都市の伝統とその「近代化」という独自の視点（後述）から琉球建築史の時代区分の仮説を組み立てた。すなわち、時代を区分する重要な画期として外国文化の導入・受容の時期を重視して、明への入貢(1372)、薩摩浸入(1609)、琉球処分(1879)を設定し、これにより大きく古代琉球、中世琉球（古琉球）、近世琉球、近代沖縄に時代区分するというものである。

(3) 主要な建築類型および寺院・王城・集落・都市の空間構成の変遷過程：

「琉球建築史」構築の軸となる首里城正殿について、考古学の調査成果や冊封使の使琉球録・使琉球詩を分析し、14世紀から戦前に至る変遷過程を把握した。早い時期のグスクから御庭（ウナー）をとともなう正殿がつけられていたが、首里城正殿の特質は東アジアにおいて希少な重層宮殿建築である点に求められる。

また正殿以外の建築についてもその様式、平面などを考察し、また沖縄本島のほか奄美大島や八重山も視野に入れて、グスクの変遷過程を捉えた。

住まいと集落・都市： 八重山の特異な集落や本島の集落について考古学資料・文献

資料を収集し、自然・歴史・文化のなかで住まいと集落の空間構成と変遷を捉え、また典型的な集落と計画的な都市である首里や那覇の比較を行った。

仏教建築、神社本殿、道教の廟などについて、田辺泰『琉球建築』（座右宝刊行会、1937年）、伊東忠太『琉球 建築文化』（東峰書房、1942年）、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）を参照しつつ、東アジアにおける建築文化の交流を視野に入れ、その様式と変遷を捉えた。禅宗寺院建築は日本と中国、神社本殿は日本、道教の廟は中国というように、文化交流の姿が建築様式に如実に表れている。

東苑・同楽苑・南苑（識名園）の空間構成とその変遷について、庭園史の成果を参照しつつ、検討した。その本質的な環境造形の変化を、景のありようや景の見かたから、瀟湘八景 禅院十境 琉歌八景と捉えることができると考える。

(4) 中国・朝鮮・日本との建築文化の交流： 朝鮮との交流では、紀年銘をもつ高麗瓦についての既往研究を整理し検討したが、どのような建築に高麗瓦が葺かれたのか、建築様式とその伝来、瓦匠や大工の問題については諸説があり、現在まだ結論や定説が得られる研究段階ではないといわざるをえない。

また日本との交流では浦添グスクを拠点とした察度王朝時代における建築文化の交流の一事例として、頼重の護国寺創建伝承を手がかりに真言宗寺院建築の伝来を推定する作業を行い、浦添から波上への寺院移転を推測した。

琉球王国成立以降について、双対性の観点から検討し、日本との交流では熊野信仰と神社建築、また住宅様式の伝来と実態、中国との交流では冊封使の渡琉や交易にとともなう、公私を交えた道教の建築、華僑の住宅様式の伝来、実態を推定した。使琉球録から華僑の住宅の姿などが判明する。

(5) 琉球建築の評価： 固有性の視点から首里城正殿・南殿などの特異な平面形式や重層構造を生んだ要因を検討した。また琉球の建築の根底にある「グスク」について、国語学や考古学などの成果を踏まえ、建築史的な意義を再検討した。また普遍性の視点から東アジアさらに世界のなかで琉球建築を位置づけることを試み、琉球と日本、中国、韓国などの建築史との比較を通じて琉球建築の普遍的な特性を把握する作業を行った。比較の軸に11-12世紀の奥州藤原氏の「首都」平泉を加え、その特性の明確化を行った。

(6) 「琉球建築史」の特性： 琉球の文化には、固有の伝統を維持する根強い傾向があること、革新的な変化は外国との交流によってもたらされること（「近代化」）などの特性がある。すなわち日本と同じ歴史的・文化的な特性が見出される。

このことから、琉球建築史の構成を、固有の伝統を継承する庶民住居や祭祀施設、集落、

グスクなどと、近代化（日本化・中国化）の原動力というべき仏教建築 禅宗寺院建築（日本・中国）、真言宗寺院建築（日本）や神社建築（日本）、道教建築（中国）、渡来人の住宅、居留地（日本・中国）などに大別し、前者すなわち固有の伝統建築を基軸としつつ、それぞれの変遷ならびに相互の関係とその変遷として琉球建築史を叙述するのが妥当と考える。

(8) 宮殿と住居： 少なくとも近世中期以降においては、宮殿と住居のあいだに同じ空間構成の原理が認められる。そのような状況を生み出した歴史的背景などについて知見を得た。

(9) 首里と那覇： 首里城はグスクの固有の伝統を受け継ぎつつ大型化されたが、首都である首里は国際的な宗教の仏教（禅宗）建築によって荘厳された。港湾都市那覇は神社や廟なども建設され、さらに国際色が濃厚であった。いずれも統一王権（第一尚氏王朝）による外国文化の本格的導入を反映している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 件）

〔学会発表〕（計 件）

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 康夫 (TAKAHASHI, Yasuo)

花園大学・文学部・教授

研究者番号： 60026284

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：